
誇りと使命感を持って、国家と国民に奉仕・ しないといけないですか？

エイト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誇りと使命感を持って、国家と国民に奉仕……しないといけないですか？

【Nコード】

N0953BA

【作者名】

エイト

【あらすじ】

地元で、安定している。おまけに興味の空手が続けられそうだ。それに、他の民間会社はみんな全滅してしまい、行くところがない。

僕が警察を選んだのはそんな理由です。

正義、憧れ、目標。そんなものは全くない状態で、流されるままに警察という組織に入った幹久。

そんな心構えで、果たして彼は警察官として一人前になれるのか？

第1話 麻雀に勝っても、勝ち組になれるとは限らない(前書き)

この物語はフィクションです。

実際に人物、組織とは一切の関係がありません。

第1話 麻雀に勝っても、勝ち組になれるとは限らない

「ローン、タンヤオのみ、1000点。もちろん上がり辞め。これでこの半荘は僕のトップですね」

タバコの煙と、コンビニのゴミガラにまみれた学生向けのワンルームマンションの一室。4人の学生が小さなこたつを台にして麻雀を打ち始めてから、かれこれ数時間が経過しようとしていた。

「ええつと……僕がトップで36200点だから、プラス56ですね。」

ラストを上がり、トップを逃げ切ったのは鎌倉幹久。某国立大学の3回生。身長はお世辞にも高いとはいえず、165センチ前後。(本人は人から聞かれた際には、常に166センチと言っている)童顔で、見ようによっては高校生にも見えるが、これでも一応空手部の副将だったりする。

「おいおい、ミッキー。そんなせこい手で、こっちのチンイツつぶすなよ」

幹久の対面に座っている男がやる気なさそうに、千点棒を真っ直ぐ投げた。逆転トップを目指してテンパイしていたチンイツを、あっさり流されたせいである。

「まあまあ、丸さん。次の半荘があるって。ミッキーの麻雀は流れから外れたら、すぐに落ちるからさ」

丸さんと呼ばれた男は、幹久と同じ部活の4回生、さらには前主

将だった人物だ。身長は175センチくらいだが、圧巻するのはその巨漢。体重は優に100キロは超えるであろう。

呼び名が丸さんなのは、身体が筋肉と脂肪のコラボレーションで風船のようにふくらんでいるせいではない。単に山丸行博という名前だからである。

一方、山丸をなだめているのは彼と同回生であり、前副将であった村山昂志である。村山は山丸とはまさに対称的な風貌で、小柄で細身。体重は50キロを切るか切らないか。だが、その身体から繰り出される突きと蹴りのスピードに、誰もついていけない。彼が4回生となって、引退した現在でも、それは変わらない。

「ええつと……どうしましょう。もう1半荘しますか？」

幹久が記録を学園祭のチラシの裏に書きながら、恐る恐る尋ねる。その表情にはできるならこれで帰りたい。と読み取れた。

「おい、ミツキーよ。まさかこれで終わりじゃないだろうな？忙しい中、俺が時間作ってわざわざ来ているのに」

ドスの聞いた声を上げたのは、安本和明。彼は今年卒業したOBであり、現在は某企業の営業をしている。当然、彼も幹久と同じ空手部出身だ。しかも、幹久が1回生の時の主将であり、彼の代は部員が1人。まさに幹久は安本から空手のイロハを叩き込まれた。2年経った今でも、安本には逆らえない。

だが、幹久にも、あまり夜遅くまで外出しにくい事情があったため、珍しく食い下がる。

「いえいえ、勘弁してくださいよ。それに、今日のメインは麻雀じ

「やなかつたですし……」

腰が引けた声を出しながら、幹久はせつせと部屋の窓を開けてタバコの煙を追い出し、ゴミ箱片手に散らばったビールの缶とつまみの残骸を回収していく。それが終わると、カップラーメンの残り汁を台所の流しに捨て、容器をゴミ箱に入れた。

「ミツキー、いつもすまん。安さん、今日の所はいいんじゃないですか。ミツキーもこれから色々大変ですから」

この部屋は山丸の下宿である。他の3人は自宅生なので、自然と山丸の家が溜まり場となるのであった。そんな中、整理整頓に無頓着な山丸部屋の掃除をしているのが幹久である。

また、山丸は幹久が帰りたがっている事情を知っていたため、助け船を出している。さつき、幹久に麻雀でしてやられたことは、既に頭の隅に追いやっている。

山丸の助け船が聞いたのか、安本は腕を組んで考える仕草をする。

「そうだな。確かにそろそろ夜中の12時になるから……」

安本の言葉は不意に遮られる。その原因は幹本の携帯電話が発する着信音だった。

ゆっくりとしたリズムのクラシック音楽が流れる。

「お、何ミツキー。着信、ホルストの木星にしているのか？いい趣味してるな。それ好きなんだよね」

村山がそんなことを言うが、幹本の心は穏やかではなかった。一言でいうと、やばい。である。

「やば。この着信は、家族用なんですよ。……ああ、やっぱり」

液晶には「鎌倉博」の文字が無慈悲に表示されていた。幹久は人差し指を立て、静かに、と3人をお願いしてから恐る恐る電話に出る。

「もしも……」

「幹久！！何時だと思っている！！一体どこで何をやっているんだ」

電話からはいきなり怒声。幹久の父、博はお怒りの様子。もしかすると、若干酒でも入っているのかもしれない。幹久はなぜか背筋を丸めながら、小声になって話す。

「いや、ちょっと空手部の大事なミーティングがあつて」

「本当か？」

これは本当のことである。幹久の次代の空手部幹部の役職をどうするか。それについて話し合うために4人は集結したのだ。しかし、話し合いはわずか20分足らずで、安本と山丸の「主将は田中。あとはあいつ等に任せればいいんじゃないかね？」の一言で終了。

残りの数時間はずっと麻雀大会だったのだ。

「次の代の役職を決めたりとかしてたんだよ」

「そうか。だが、お前は自分の状況を分かっているのか？3回生の1月だろ。就職活動もしないで、一体何をやっている。他人のこと

より、まずは自分の身を固める努力をしろ」

父の言うことは正論である。正論すぎて、何の反論もできない。幹久は小声でただただ、父の言うことに、はい、はい、と何度もオウムみたいに繰り返すことしかできなかった。

「ああ、わかった。もうすぐ帰るから。じゃあ」

すっかり父によって、エネルギーを枯渇させられた幹久は疲れ切った顔で電話を切った。ふと周りを見ると、3人が何とも言えない表情で見ている。

山丸が幹久の背中を優しく叩いた。

「ま、気にするなや。こんな俺だって就職決めたんだし」

さらに村山が後押しする。

「そうそう、丸さんみたいな問題児でも大丈夫だったろ。真面目な幹久なら問題ないって。」

山丸のなぐさめも、幹久にはあまり届かなかった。彼は、普段はいい加減、下ネタ好きで、飲み会の際には真っ先につぶれるくせに、酔った勢いという名の問題を数多く巻き起こしている。そのたびに、副将の村山の胃が痛くなっていった。

だが、山丸にはそれをさしおいても有り余る一種のカリスマがあった。だからこそ、その年は例年の倍の 신입生が入部してきたのだ。幹久は山丸には一生勝てないと思っている。

また、山丸だけではない。村山も安本も幹久にとっては、ある種の超えられない壁であった。そんな彼らですら、就職活動の時には

四苦八苦していたのだ。

「先輩、気を遣って貰ってすみません
続きはまた今度に」

幹久は山丸のアパートをあとにした。

翌日、幹久はマイカーのハンドルを握っていた。彼の通う大学は人数の割りに敷地が広く、学生にも車通学が許可されていたため、1回生の秋から今まで車通学をしているのだ。

「はあ、昨日は参った。親父が正しいのはわかっているけど・・・

昨日、真夜中の帰宅の幹久を待っていたのは、眉毛がすり上がり、鬼の形相をした父であった。そのまま、説教に移行し、スタボロにされたのである。

幹久の父は企業の人事畑として20年以上の経験を持ち、現在は社内人事だけでなく採用方面も統括している立場にあった。つまり、その道のプロフェッショナル。一介の学生が何を言っても太刀打ちできるわけではない。

そんな父に、近年の情勢と一般的な学生が既に行うべきこと、そして幹久が何もしていないことを論理的に淡々と説明され、最後に「どこも行けませんでした。ではすまないからな」と一言添えられたのだ。

むしろ、感情的に怒られたほうがましである。

「でもなあ、特にやりたいことがあるわけでもないし」

ぼんやりと運転しながらつぶやく。

ふと時計を見る。2時限目の講義まであと10分ほど。今のままだと、遅刻ギリギリのタイミング。次の授業は2回生の時に落とすってしまった必修の授業。しかも教授はしっかりと出席を取る。少し急いだ方がいいのかもしれない。

幹久は、いつも走る大通りを左折して、小道に入った。そこは道幅が狭いのであまり好きではなかったが、近道なのでしょうがない。そのまま小道を順調に走れば問題がなかった。しかし、運が悪いことに小学生の集団下校の固まりが前方に見える。

「ああ、くそ。横にどいてくれよ」

幹久はイライラしながら、クラクションを鳴らす。そして、ようやく小学生の集団を横からすり抜ける。直後にT字路。ここで、運は幹久の方に向いた。

T字路には車両がない。

幹久はそのままT字路に突っ込んで進んだ。

あとは、大学まで一直線。何とか講義には間に合いそう。ホッと一息ついた瞬間である。

「その自動車、一時停止無視です。止まりなさい！」

後方から、白黒塗装で、赤色ランプを回しているクラウンが張り付いてきた。つまり、警察に交通違反で停止を求められているのである。

「あ………やられた。」

幹久はがっくりとうなだれた。

遅刻確定、点数減点、おまけに反則金。昨夜の麻雀の勝ち分はこの場であっさりと吹き飛んだのであった。

だが、卒業後、今度は自分が取り締まる立場になるということを、彼はまだ知るよしもなかった。

第1話 麻雀に勝っても、勝ち組になれるとは限らない（後書き）

はじめまして、エイトといたします。

このたびは本作を読んでいただき、ありがとうございます。

「小説家になるう」のメインの作風とは大分異なっていますが、続けていきたいと思えます。

ご意見、ご感想等ございましたら、よろしく願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953ba/>

誇りと使命感を持って、国家と国民に奉仕・・・・・・・・しないといけません

2012年1月2日02時53分発行